福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

学びを耕す授業をデザインする：7年生秋の題材「日本の伝統音楽に親しもう!～声による表現を探る～」(「日本の伝統音楽1」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳, 博恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10869

学びを耕す授業をデザインする

7年生秋の題材「日本の伝統音楽に親しもう！ ～声による表現を探る～」（「日本の伝統音楽Ⅰ」）

柳　博恵

「日本の伝統音楽」って何？日本の音楽の歴史を紐解き，音楽文化について理解を深める。鑑賞を通して，我が国の伝統音楽の声の特徴を捉え，曲種に応じた発声との関わりを理解するとともに，声の音色や響き及び言葉の特性などに着目し，協働で声による表現を探っていく。音楽科の学びを通して，クラス全員が授業に参加し，共に創る授業となるようデザインしていく。

Ⅰ．学びの構想

学びのつながりのあるカリキュラムをデザインする

音楽科教育で培われた音楽を愛好する心情や音楽に対する感性は，自分の人生を幸せにすることだけにとどまらず，社会の幸せづくりに貢献していくことのできる人材の育成に大きな役割を果たすものである。

そのような「生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育成する音楽科の学びを構成する上で，９年間を見通し，表現及び鑑賞の幅広い活動を多彩に展開できるよう，題材を配列する工夫が重要と考えてきた。

具体的には，次のようなカリキュラムの柱を立て，１年間の学習のつながりが分かるように配列している。下記に示す春・夏・秋・冬の大きな区切りの中，９年間で 36 の題材が有機的に絡み合い，学びがスパイラルに繰り上がっていくように，それぞれの題材を位置づけている。

春：音楽を総合的に理解し，構築する題材（４月～６月）

夏：合唱を中心に表現力を高める題材（７月～９月）

秋：多様な音楽に触れ音楽観を広げる題材（10 月～12 月）

冬：学年オリジナルの音楽づくりを通して，音楽を創造する楽しさを味わう題材（１月～３月）

こうした題材の連続性と発展性を意図した学習展開を図ることで質の高い学びが実現され，子どもの知覚・感受する力，思考・判断する力，表現する力，聴き取る力などが確実に伸びると考える。

７年生秋の題材となる本題材では，我が国の伝統音楽に触れ，そのよさを味わうきっかけとなることが大切であると考え，「日本の伝統音楽」の特徴を感じ取り，声による表現を工夫しながら，音楽観を広げたり，深めたりすることを大きなねらいとしている。日本の音楽に対する感性を豊かにし，我が国の伝統音楽のよさを大切にしていこうとする気持ちへとつながることを期待する。

生涯にわたって「音楽文化」に親しむ協働探究をデザインする

社会の国際化が進む今日，我が国の音楽文化に愛着をもち，そのよさや美しさを感じて理解するとともに，諸外国の音楽文化を尊重する態度を養うことは，音楽文化についての理解を深める上で重要な課題である。そこで，我が国や郷土の伝統音楽について理解を深め，各ジャンルの音楽の共通点や相違点に気づくことによって，音楽的な見方・考え方を働かせて，音楽文化についての理解を一層深めることにつなげられるようにする。

本題材では，「日本の伝統音楽」の声の特徴と言葉の特性（抑揚）に焦点を当て，声明・能・狂言・長唄・民謡の５つのジャンルにつ

いて探究活動を行う。「日本の声・自分の声」に向き合い，対話しながら認識を深められるよう，個からグループへ，そしてクラス全体へと様々な探究の場やコミュニティを設定する。学びが明確になるように声に着目することで，実際に歌ったり，比較聴取を取り入れたりしながら，声質や歌い方の特徴を探り，各自が気づいた特徴を仲間と共有し合い，音楽の背景にある風土や文化・歴史を理解することで，音楽の捉え方や表現が深まっていくのである。学校での音楽の学びが，子どもたちの人生において意味のある存在として実感できるよう，生涯にわたって生活や社会の中で生かすことのできる力を育みたい。

Ⅱ．学びのストーリー

1．長く歌い継がれてきた「日本の歌」の特徴を探ろう！　（第1時～2時）

日本の音楽の特徴って何？　（第1時）

夏の題材で合唱表現に取り組んだ子どもたち。10 月になると，授業の始まりに行う「カデンツ」の声出しも，声量が出てきて，音程が確実な時は豊かな響きを感じながらできるようになってきた。美しい響きの時に，「今の声，どんな声？」と問うと，「ふるえている～」とビブラートをわざとつけて歌って表現する。

発声の時に出した自分の声の特徴を掴んでから，「日本で長く歌い継がれている歌って？」の問いかけに「君が代」「校歌」「ふるさと」「赤とんぼ」などの反応があった。

教師：それでは，今あがった曲の中で「赤とんぼ」を聴いてください。
（「赤とんぼ」を聴く）
大賀：高い声。
美佳：落ち着いた声で，子守歌のよう。
教師：声の特徴をつかんだのね。では，「赤とんぼ」はいつ，どこで生まれた曲？
生徒：1921（大正 10）年，兵庫県，作詞は三木露風，作曲は山田耕筰です。

楽曲について，歴史的背景や歌詞の意味，曲の特徴やこの曲を歌う時にはどんな声がふさわしいかも確認した。

教師：次に，この曲を聴いてください。
（「Automatic」宇多田ヒカルを聴く）
孝弘：聴いたことない！
博嗣：何を言ってるか分からないです。
孝弘：古い！バブル？50 代のおじさんが聴いていそう，ダサい。
教師：もう一度聴いてみて。プリントに書かれている平仮名の歌詞を見ながら，歌い方で区切れているところに印を入れてみよう。
（「Automatic」を聴く）
「な　なかいめのべ　るでじゅわきをとったきみ」
孝弘：変なところで切れているなぁ。
恒星：文節の切り方と違う
教師：そうか。気づきがあったね。では，次はこの曲。
（「夏の思い出」を聴く）
「なつがくれば　おもいだす」
理彩：ことばとブレスが一致している
教師：ことばのまとまりね。フレーズっていうんだけど，「夏の思い出」はフレーズのまとまりが感じられたのね。

「Automatic」「夏の思い出」「赤とんぼ」の平仮名のみの歌詞カードにブレスの場所を記入した。

日本の歌には言葉の抑揚と旋律との結びつきや，言葉のまとまりとフレージングの一致があることに気付いた。

教師：他に気づいたことある？
伸輔：ゆっくりしている
教師：速度のことね。
光彦：昭和っぽい
教師：何で？
光彦：テンポは遅いし，古くさい。
教師：長く歌い継がれている曲よ。
孝弘：文科省の人が，やるように言っているから。
教師：何でそのように言うと思う？
由里：日本のふるさとの良さを知ってほしい。
博嗣：昔を懐かしく思い出してほしい
教師：長く歌い継がれている，日本の歌の特徴は，他にありますか？

「覚えやすい」「リズムが一定」「みんなが歌える」「曲が短い」「七五調？」「歌詞が深くて日本語を大切にしている」「長い音が続く」「春夏秋冬（四季）を感じることができる」「情景が思い浮かぶ曲になっている」「歳をとっても歌える」など感じ取った特徴を次々に発表する中，孝弘は「面白くない，つまらない，ださい」と大きな声で発言した。

クラスの場の空気が凍った。「えっ!?」「その発言ってあり？」のところで１時間目は終了した。

例年，この時期にこの題材を実施しているが，今回の孝弘のような発言は初めてである。これまでは「古くさいな」と思いつつも，特徴を必死に探す姿やこれから自分たちが受け継いでいこうという雰囲気が当然のようにあった。授業者は動揺した。全体発言でこの言葉を出す？とあまりにも正直すぎる発言ができる孝弘を受け入れるのに必死だった。教室の空気が止まった感があった。しかしながら，この孝弘の発言をきっかけに本人もクラスの仲間も「我が国の伝統音楽」について向き合うこととなっていく。

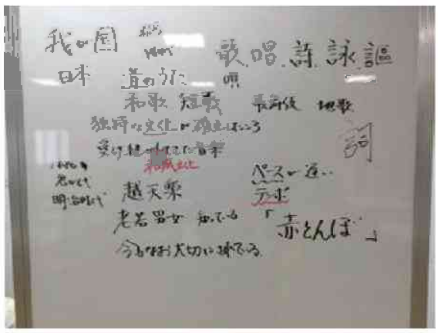
我が国の伝統音楽の特徴って何？（第2時）

伝統音楽といえば…歌舞伎，越天楽，民謡，今なお大切にされている，テンポが遅いなど意見が出た。声については喋る声，歌う声の特徴を分析した。伝統音楽については知識が少ないから知ろうとする前向きな生徒がほとんどの中，つまらない音楽と拒否反応の見られる生徒もいた。

そこで，声に着目して，自分の声はどんな声かを分析する。声を見つめ直す，捉え直す。声を出す→どんな声か確認する→声質を分析・分類するといった活動は，隣の席の子とグループの仲間とクラス全体で共有できた。

自分の声を仲間に聴いてもらい，「イケヴォ」「甲高い声」「低くて太い声」など客観的に捉えることができた。

クラス全員が，長く受け継がれてきた伝統音楽について知識を習得し，身近な声とつながりをもつことで，少しでも関わりやすくする方法を取り入れた。



我が国の伝統音楽の特徴を全体共有

(2) 日本の伝統音楽～声の特徴を探ろう！～
「民謡」の音楽の特徴って何？　（第3時）

前時で子どもたちから上がった伝統音楽のジャンルのひとつ「民謡」の「ソーラン節」はいつ・どこで・なぜ生まれたのか・誰が・どんな声でうたうのかなど視点をもって聴いた。

教師：ソーラン節といえば？
みんな：漁師，網，海，掛け声
教師：このうたはいつ，どこで，なぜ生まれたのか？
光彦：江戸～昭和初期。
大賀：北海道。
聖真：ニシン漁が盛んだったから。
教師：誰が，どんな声でうたうのかな？
孝弘：伊藤多喜雄
みんな：？？？
光彦：教科書に書いてあるやつ。
結衣：漁師が力強い声で，男の声でうたっている。

孝弘は，教科書にある民謡「ソーラン節」のページを見つけて，目に入った情報を得意気に発表した。彼の細かい教科書の読み取りは，クラスの仲間にもよい影響となった。クラス全体で，「民謡」について考え，探ろうとする雰囲気が高まった。

教師：どんな楽器が入っている？
由里：前奏は三味線。
教師：一緒にうたってみよう！

ＣＤに合わせて，一緒にうたうことで，「ハイハイ・ハァドッコイショ」の囃子ことばの張りのある力強い声に関心をもった。このあと，グループで「ソーラン節」の音の抑揚や特徴を声に出しながら，マーカーで記入した。

教師：なんで楽譜ってないのかな？
孝弘：楽譜なんていらない
光彦：歌えないから
由里：リズムが一定ではないから
聖真：歌う人によってバラバラだから
教師：どうやって歌い継がれている？
光彦：継承。
由里：師匠から弟子に語り継がれている。
教師：口伝（くでん）って言うのよ。

もう一度ＣＤを聴きながら真似をしてうたってみた。のびのある，力強い声であることを

再確認した。ＣＤ女声版は，「耳がキンキンする，声が高すぎる，女の人のほうが合っている感じもする」などの感想があり，伸ばす音の声が震えていることをコブシであると理解した。

授業に取り組む様子が少し変化してきた。逸脱することもあるが，孝弘，央介，光彦，太郎はじめ，音楽の授業に関する発言が増えてきた。

2. 言葉の抑揚と声の特徴を感じ取り，表現を工夫しよう　（第4時～5時）

民謡にふさわしい声や音楽の特性を生かしてうたおう　（第4時）

教師：「ソーラン節」って何をするときにうたうの？
聖真：漁で網を引くときにうたう。
教師：なぜこの曲ができあがったのかな？
恒星：ふるさとの良さを知ってほしい。
里沙：昔を懐かしく思い出したい。
教師：どんな声でうたったらよいかな？
由里：力強い声。
孝弘：おっさんみたいな声。
光彦：甲高い声（女の人の声）。
教師：なんで楽譜ってないのかな？
由里：漁のリズムに合わせてうっていた。
聖真：毎回，アドリブでうたわれている。
由良：師弟関係で師から弟子へ受け継がれていった。

各自，ワークシートに「①民謡はどんな声で歌われているだろう②民謡らしく歌う発声はなんだろう」について考え，まとめた。

「①力強い声，野太い声，甲高い声②お腹から息を出す，喉をしめている，ビブラートみたいなのがかかっている，こぶしをきかせる」などの意見を共有した。民謡らしくうたうための発声や身体の使い方を感得した。実際に声を出しながら，音の高さ・長さ・コブシを確認できた。

次に，「ソーラン節」のＤＶＤを鑑賞し，うたい方を確認した。立ち方や姿勢など，要点を掴んだ。楽器については，三味線・尺八も確認できた。

孝弘はワークシートに《オリジナル伝授法》について「①歌詞を覚える②頑張ってうたう民謡らしく腹から力強く声を出す」と書き，言葉の抑揚も矢印で書き，声の出し方のコブシは手の拳の絵を描いて自分なりにまとめた。彼自身の授業に向かう方向性が，仲間に伝わり，授業から脱線することはあるが，協働で学びが展開されていくことを実感できる場面が増えてきた。

声の音色やリズム（間），旋律（節回し）など声に出しながら知覚し，それらが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，民謡にふさわしい声を追究していく姿が見られた。

オリジナル伝授法を考えよう　（第5時）

前時の個人ワークシートを生かして，グループで旋律（節回し）・リズム・コブシなどわかりやすく伝える譜面を作成した。

教師：教科書Ｐ４６のオレンジの線を見てみよう
孝弘：音程がわかる
教師：すごい！気づきがすばらしい！他には？
由里：息の吸うタイミングが分かる
教師：五線譜ではないけど，見れば理解できるよね。

このあと，のばす・休む→音の長さ，上がる・下がる→音の高さ，こぶし→歌い方など図形楽譜のようであると気づき，春の題材で学んだ「音と音楽」でオリジナル図形楽譜を作ったことを思い出した。

教師：グループで工夫し合って，自分たちでオリジナル楽譜を作りましょう。
聖真：教科書の楽譜を写してもいいですか？
教師：写経はダメです。

仲間と工夫しながらまとめていく

CD の声を真似して歌いながら，表現の工夫されているところを聴き取り，どのように書いていくと良いか各グループで話し合った。

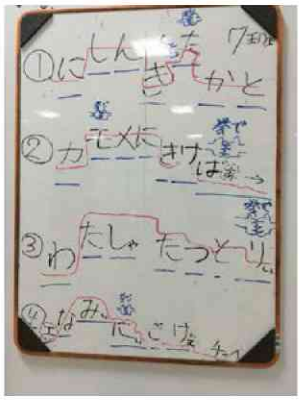
・口の開け方を図式化，うたう姿勢の絵をかく，言葉で書く

それ以外に
・上がり下がりを線で表す
・こぶしのところやビブラートがかかっているカ所には波線が書かれている
（こぶし…□　ビブラート…△　などの書き方も）
・音の強弱はクレッシェンド，デクレッシェンドの記号で表している
・歌い方が強い部分やアクセントが置かれているところには青色で丸を付けていた
・言葉の区切りで線を入れていた
・その他必要なところは形容詞で補足していた
・必要なところにはイラストを描いていた（姿勢など）

この題材では，グループ活動が多い。そこで，今回はクラスの実態から，音楽委員，生徒委員，教員で音楽のグループメンバーを構成した。子どもたちが作ってきた構成は，すばらしく良く考えられていた。核となる存在の子どもに，授業から脱線しそうな子どもを上手に組み合わせてあった。音楽委員たちが，みんなのことを考えて作ったグループであることを告げると，誰も大きく反対することはなく，いい意味での刺激があり，学びがクラス全体で深まったり，広がったりしていくことを可能にしたと捉えている。

プロから声の特徴や歴史を学ぼう　　（第6時）

授業前半は，各グループのオリジナル伝授法を発表した。【発表】（生徒の感想も含む）



7班の楽譜

1 班　歌がうまかった　迫力があった
おっさんみたいな声

2 班　説明の仕方がよかった
姿勢などをイラストで示していた

3 班　音程と高さを，線を引くことで分かりやすくしていた

4 班　波を線で階段のように表していた

5 班　歌うときに少しスウィングしていた

6 班　「にしん きたかと」の「に」と「き」→言葉の頭を強調していた

8班の楽譜

7 班　リズムの強拍を表していた　唯一，裏拍子を取り入れながら歌っていた

8 班　記号をたくさん用い，項目ごとに分けて分かりやすくしていた
（強調するところ，上がったり下がったりするところ，軽く切るところ，上に向かっていくところ，母音が強調されているところ　など）

教師：どの班の楽譜がいい？
孝弘：俺らの班に決まっているやろ。
教師：確かに。7班のコブシなど特徴捉えて，わかりやすいね。

子どもたちは，ゲストティーチャーの吉長先生からの講評を真剣に聞いていた。他者からの価値付けは彼らにとって評価されるとても大事なことであると感じているからだと思った。さらなる学びへつながることを確認できた。

雅楽「越天楽」を聴いて，楽器の名前，譜面のことを学んだ。

（ＧＴの説明）
楽器を演奏するために音を言葉にする必要があり，「チラロやトラロ」などカタカナの楽譜が出回った。中国から入ってきた時は音しかないから，日本人が知っている音に変えた。（1200年前）師匠から教わったら自分で楽譜を作らないといけない。渡来人によって大陸から（仏教など，奈良時代）日本にだけ残っている→朝鮮や中国には今は残っていないのはなぜだろう？→戦争が関係しているんじゃないか（中国などでは国が変わる，前の文化はすべて消滅させてしまう）

ＧＴと一緒に，篳篥の唱歌（しょうが）をうたい，均等なリズムでないことを体験して分かった。声に出したり，手で拍子を取ったりして実感できた。「間」がとても重要で間抜けの話に子どもたちはひどく感心していた。

ＧＴから講評と説明を受ける

各ジャンルの声の特徴･歴史を学ぼう　（第7時）

民謡と口唱歌の特徴を振り返り，旋律と声の特徴，時代背景を再確認した。日本の音楽でもっとも古い「声明」を聴き，お経のようで，音が一定であることをクラス全体で把握した。

声の特徴と言葉の特性（抑揚）を掴みやすくするために，同じ詞「かえでいろづくやまのあさは」をうたったものを比較聴取した。

教師：「民謡」の声の特徴って？
博嗣：音程は高いです。
教師：息つぎはどうなっているかな？
光彦：「かえで」と「いろづく」の間に微妙な「間」がある。
教師：声はどんな感じ？
孝弘：ふるえている感じ。

５つのジャンル（声明・能・狂言・長唄・民謡）の声をじっくり聴いて，特徴を掴み，言葉や図で表現できた。

グループで感じ取ったことを共有する

言葉の抑揚と声の特徴を感じ取り，表現を工夫しよう　（第8時～9時）

グループごとに，各ジャンルの声を特徴づける様々な要素や要因についてまとめ，定義付けを行った。

1　声明→声が低い　音程が一定
2　能→はきはきとしゃべっている
3　狂言→はっきりしている　めりはりがある　ふつうにしゃべっている感じ
4　長唄→つながりがある　鼻と口の間で歌っているような感じ
5　民謡→高い声　張りがある声　コブシ

声の音色や旋律などに着目して，各ジャンルらしくうたうには，どのようにしたらよいか表現追究をした。「民謡」との比較，他のグループとの比較をすることで，何を学んでいるか明確になった。

ＤＶＤを視聴して，見て聞いて感じ取る

仲間のジャンルの特徴を知り，再構成しよう　（第 10 時～11 時）

発表を行い，自分たちと仲間との作品を比較聴取したり，実際に声を出したりして，特徴を感じ取った。発表を受け，自分たちが探究しているジャンルの声の特徴を表した表現になっているかを再確認し，表現をさらに追究していった。

音楽集会に向けて，クラス代表を決定した。2つのグループにはクラス全体で課題を共有し，みんなでよりよい表現となるよう，意見や感想を活発に交換できた。

これまでの学習を振り返ろう　（第 12 時）

１月に行われた全校音楽集会（５年～９年参加）では，各学年の演奏を聴いて，系統的な自らの学びのプロセスや表現方法を振り返り，次への学びへとつないでいくことができる機会となった。自分たちの演奏を披露し，先輩から講評をもらったり，先輩の発表を聴いて，あこがれや感動を抱くとともに，自分の未来の姿を想像したりすることができたようである。

7年生の発表について，先輩たちは自分の時と比べて感想を言える学びのサイクルになっていることに，子どもたちは感じ取り，より質の高いものを目指すようになっていく。

Ⅲ．省察

(1)探究のプロセスを問い直す

聴く･うたう活動における学びの深まりを生み出すために

“音楽って何？”“音と音楽の違いは？”そんな疑問から音楽の探究が始まった子どもたち。 本題材では，学びをつなぐことを意識し，生涯にわたって音楽文化に親しむ態度を育むことに重点を置いた。我が国の伝統音楽として，声明・能・狂言・長唄・民謡の５つのジャンルについて探究活動を行った。声の特徴と言葉の特性（抑揚）を掴みやすくするために，同じ詞（“かえでいろづく　やまのあさは”）をうたったものを比較聴取した。鑑賞活動（比較聴取）において，音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き，言葉で説明するなどして音楽のよさや美しさを味わう能力，音楽の特徴を文化・歴史や他の芸術と関連付けて鑑賞する能力，我が国の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り鑑賞する能力を育てていくことをねらいとすした。

「いつ・どこで・なぜ生まれたのか・誰が・どんな声で歌うのか」の視点から，歴史を紐解き，音楽文化について理解を深める。そして，改めて自分の声の特徴を捉え直すことで，声を軸にした学びの連続性と系統性を実感させることができた。

音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を音楽をづくっている要素とその働きの視点で捉え，自　己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連付ける音楽的な見方・考え方をこれからも大切にしていきたい。これらを学ぶことで，音楽の意味や価値について深く理解し，音楽を現在や未来の生活において実践的に活用することができる力を獲得できることを期待する。

感動の共有から音楽文化を支える協働探究が始まる

本校には「学年を超えての学びが子どもの中で響き合い，相乗効果となって受け継がれていく」　学校文化がある。そこで，見通しをもって主体的に取り組めるように，音楽委員が中心となって，授業をデザインする。個人探究から始まり，グループや学級，学年や全校とコミュニティの規模を変えながら，個の学びを広げ深めていく。

また，同じ時期に同じ内容（秋：多様な音楽の探究）で取り組む題材が各学年で展開される。全　校音楽集会は，学びの集大成の場でもある。 そのような音楽集会での学習成果の発表は，学年を超えた学び合いの契機となる。音楽のよさや楽しさを感じると共に，思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成することをめざしたい。

(2)本題材のカリキュラムの位置づけ

本校音楽科では，春：音楽を総合的に理解し構築する題材，夏：合唱を中心に表現力を高める題材，秋：多様な音楽に触れ音楽観をひろげる題材，冬：学年オリジナルの音楽づくりを通して感動を共有する題材，というように９年間で設定しており，それらが有機的に絡み合い，学びが螺旋状に繰り上がっていくようにそれぞれの題材が位置づけられている。

「協働探究」の今回の実践を振り返ってみたときに“聴くこと”と“こだわって表現すること”を子どもたち自らが学んでいく姿が見られ，これからの３年間の学びの基盤となる意識の形成につながったと実感している。しかし，“素直に感じたことを表現する”という視点からみた時に，本実践の結果からもわかるように問題は残っている。子どもたちの“恥ずかしい”という感情を払拭できるような題材の扱いや授業そのものの展開・支援を考えていく必要があることを実感した。

(3)子どもの協働的な学習の場がある授業とは

このクラスは，個性的な子どもたちがたくさんおり，一斉指導の難しさや授業そのものが成り立たず大変さを感じていた。後期に入り，授業始めのカデンツ発声は，音楽委員が指揮とピアノの音取りで，仲間をリードして，子どもたちで授業に向かう雰囲気を創り出すようになり，少しずつではあるが学ぶ姿に変容が見られ

るようになった。これまでは，教師と一人の子どもの空間で成立する場面が多かったクラスである。仲間と創る－協働の学びを実践し，学びの方向性が少し見えてきた。

「カデンツ」後の音楽委員のひとこと感想も声の大きさやパートのバランスなど的確に伝えることができ，それを聞こうとする姿が見られるようになった。

声を出すことに抵抗がなく，互いに感じたことや思ったことを伝え合える教室空間となったことが素直に嬉しい。

この実態を踏まえ，音楽科として授業をデザインする時に大切にしていることがある。教科のもつ特性上，音楽教育は次の２つ領域の活動から成り立っている。

○個・グループ・学級集団・学年集団などさまざまな学習形態の中で，仲間との意見交換から感じたことを深め，思考を重ねながら，一つの作品を創り上げていく表現（歌・器楽・創作）活動

○音や音楽に対するお互いの感じ方（感受）や考え方（思考）を交流し合う中で，自己の感性を深め，視野を広げていく鑑賞活動

日々の授業の大半は“仲間と活動を共有する”一斉学習の場面が主となる。しかし，これらの活動すべてが，“子どもの協働的な学習の場がある授業”とは言えない。なぜなら「仲間と合唱していて楽しかった」とか，「仲間とこんな作品を創った，聴いた」といった“表面的な時間と場の共有活動”を協働的な学習活動とは言い難いからである。

主体的・創造的なかかわりを生み出し，仲間と共に感じ方や音楽表現に変容と深まりを感じ取れる活動こそが学びの質を高める“協働的な学習の場がある授業”であると考える。そのために，教師は子どもにどのような力をつけるかといった理念を明確にもち，子ども自身が「何を感じて」「何がわかり」「何ができた」を実感できる授業を構想することが基盤となる。子ども自身の学びの経験が生きてはたらく音楽活動にいかなる活動場面でも，子ども一人一人が感受したり思考したりしたことを仲間と共有する時間と場をいかに有意義なものに設定するか（仕組むか）重要である。そうした授業を教師が設計することで，子どもが目的意識をもって参加する“協働的な学習の場がある授業”が創造できると考える。

(4) 協働的な学習の場がある授業をつくる手立て

①自主的活動体制をつくる

自主的・協働的な活動ができることは，仲間の自信と団結を生み出し，次の活動への意欲につながる。

②聴くことの重視

仲間の発言や声・音に耳を澄ますことは，音や音楽はもちろん仲間の捉え方や価値観を評価・判断する耳を伸長すると考える。教師の発言や鑑賞作品を聴くときも，“聴かされている”“聴いている”活動から目的意識をもって“聴く”聴き方ができるようになる。こうした「聴く経験の累積」を重ね，「聴き方の学び合い」ができる場面設定へと高めていく。一人一人の感じたこと，発見したこと，描いたイメージなどを交流する「聴き方の学び合い」の場を設定することで，お互いを受け入れ，共感したり討論したりできる開かれた集団づくりをめざす。

７年生秋の題材では，音楽科のねらいに沿って，このような学びが定着するようにデザインすることが重要であると実践を通して，強く実感した。

参考文献

『日本音楽がわかる本』千葉優子　音楽之友社　2006.8
『歌唱共通教材指導のヒント』富澤　裕　音楽之友社　2017.7
『2018 年問題とこれからの音楽教育』久保田慶一　yamaha　2017.2
『「先生力」をつける！…待ち遠し音楽授業のために♪』橋本龍雄　松永洋介　吉村治広　教育出版 2017.5
『これでいいのか，にっぽんのうた』藍川由美　文春新書　1998.11